

ブタゲ11周年を振り返る（特集 ブタゲ11周年）

著者	村松 幹男
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
号	9
ページ	6-10
発行年	2015-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001255/

ブタゲ11周年を振り返る

村松 幹男

ブタゲ／ぶたげ（北翔舞台芸術）が発足してから十一年が過ぎました。本当は前号で十周年特集を組むべきだったのですが、今号でこの十一年を振り返ろうと思います。

ブタゲ・・・当時の「北海道浅井学園大学短期大学部人間総合学科舞台芸術系」の略称として、二期生あたりから使うようになりました。三期生が現在のロゴマークを作成し、今でも使用しています。

沿革

ブタゲが所属している現北翔大学の沿革を簡単に振り返ろうと思います。



創立者故浅井淑子先生と猛先生は、一九三九年に北海道レスメーカー女学園（現在の北海道レスメーカー学院）を開学しました。当時まだまだ女性の社会進出が難しい時代に、「服装教育の実施をとおし、婦人の社会的地位の向上と独立できる能力の育成を念願して」設立し、建学の精神として「女性の社会的地位の向上を目指す」、女性にふさわしい職業的技能と幅広い教養を身につけた、自立できる社会人の育成、教育理念として「愛と和」を掲げて開学したのでした。その後、教育免許状を取得できる短期大学の設立をめざし、一九六三年に北海道女子短期大学を開学しました。その後順調に発展し、

一九九六年には服飾美術学科（服飾美術コース、生活文化コース）、工芸美術学科、保健体育学科（体育コース、養護教諭コース）、初等教育学科、経営情報学科（経営情報コース、国際情報コース）の五学科六コースを有する短期大学となりました。専攻科も、服飾美術専攻、工芸美術専攻、保健体育専攻、初等教育専攻と四つの専攻科を開設しました。北海道内ではドウタン（道短）と呼ばれていたのです。

一九九七年に北海道女子大学を開学し人間福祉学部を開設。それにともない北海道女子短期大学は、北海道女子大学短期大学部と校名を変更しました。

二〇〇〇年に北海道浅井学園大学（短大部は北海道浅井学園大学短期大学部）に校名変更。同時に大学に生涯学習システム学部（健康プランニング学科、芸術メディア学科）を開設しました。

二〇〇三年に短大部の服飾美術学科、保健体育学科、経営情報学科を統合して、「人間総合学科」を開設し同学科に「服飾美術系、スポーツ科学系、養護保健系、経営情報系、総合教養系」の5つの系を設けました。

翌二〇〇四年、この「人間総合学科」に「舞台芸術系」が開設されたのです。ブタゲの誕生です。

その後二〇〇五年に浅井学園大学（短大部は浅井学園大学短期大学部）、そして二〇〇七年に北翔大学（短大部は北翔大学短期大学部）と校名を変更していきます。

二〇〇九年四月、生涯学習システム学部芸術メディア学科（美術、メディアデザイン、スペースデザイン、音楽）に服飾美術コースと舞台芸術コースが開設されました。

二〇一二年に短期大学部の人間総合学科はライフデザイン学科と名称が変更になり、服飾美術系と舞台芸術系が統合され、ファッション舞台アートコースとなりました。

二〇一四年に大きな改組があり、生涯学習システム学部芸術メディア学科舞台芸術コースは、教育文化学部芸術学科舞台芸術分野となったのです。

このように、大学名称や学部名称、学科名称がこの一〇年をとつても随分と変わつてしまいました。短大、大学で舞台芸術を専攻する学生の所属を書くとき非常に長くなるので、北翔大学に大学名称が変わつてからは「北翔舞台芸術」と総称しています。そして内部では先ほど述べたように、「舞台芸術系二期生」当たりが言い出した「ブタゲ」（もしくは「ぶたげ」という略称を使用しています。卒業生は、北海道浅井学園大学短期大学部であったり、浅井学園大学短期大学部であったり、北翔大学短期大学部であったり、北翔大学であったり、と……名称が変わって面倒なことの上ありませんが、いずれにせよ「我らは『ブタゲ』なのです」。

ブタゲの教育の特色

ブタゲの教育の特色は、PROBE 創刊号で詳しく載せました。

そのとき、特色としてあげたのは、

a. 学内インターンシップ的教育

b. 舞台芸術系教育の位置づけ

c. 総合的教育の実践（ポルトホールの利用と研究授業）

d. 公演発表

e. 体験

でしたが、それらの方針に大きな変更はありません。

ブタゲでは、将来舞台芸術に関わるプロフェッショナルとして仕事ができる人材の育成に心がけています。しかしながら、入学した学生がすべてそのような道に進める訳ではないことは言うまでもありません。

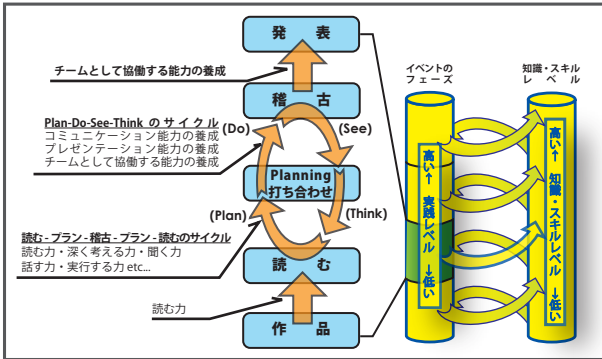
そこで、現実的な目標としては、演劇（舞台芸術）という素材を使い、体系的なカリキュラム、徹底的な実践主義を通して、どんな世界でも生きていける「力」を着けさせようと考えています。特に「コミュニケーション能力」・「チームとして協働できる能力」の育成に力を注いでいます。これらの能力は、現代社会を生き抜いている最も重要な能力であり一般企業も非常に重視している能力だと思えます。そのための具体的な方法論として、徹底した実践主義を貫き多くの公演発表（やイベント）を行っています。

経済産業省が提唱している社会人基礎力（エンプロイアビリティ）という概念があります。それは、以下の三つの能力と十二の能力要素として示されているものです。

○前に踏み出す力（アクション）↓主体性、働きかけ力、実行力
 ○考え抜く力（シンキング）↓課題発見力、計画力、創造力
 ○チームで働く力（チームワーク）↓発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力
 これらの能力は、公演（イベント）を行うために絶対必要な力です。転じて言えば、公演（イベント）を多く行うことによって、これらの能力が強力に育成されると考えているのです。

授業

月曜日に北方圏学術情報センターポルトを利用した「ポルト研究授業」を行っています。月曜日、ブタゲの学生（一年生から三年生）は江別市にある本校ではなく、札幌市にあるポルトホールに集合します。
 現在、ポルト研究



イベント指向型教育の特徴

授業の一年目カリキュラムとして「演劇入門Ⅰ」、「バックステージⅠ」、「ダンス」の三科目が開講されていますが、毎週週に一回カリキュラム通りに、例えば照明の授業を行っても、一回九〇分の授業では時間が短すぎて効果的ではないでしょう。そこで、この三つのカリキュラムを大胆に組み替えて、今日は「バックステージⅠ」を二コマ連続行うとか、三コマ連続で行う…ということを行っています。場合によっては四講目、五講目相当時間まで授業を延長して行うこともあります。

しかも、演劇を総合的に学ぶには、「照明」だけ「音響」だけの授業の他に、それらを融合した授業も必要になります。その代表的な授業が「五分間ストーリー」（実際は七分から八分）と呼ばれる授業です。「五分間ストーリー」は、短い完結した台本を使用して稽古し、音響や照明も本格的に入れて発表します（総合的教育の実践「ポルトホール利用と研究授業」）。これは、ポルト研究授業の研究成果の一つとも言え、このプログラムを利用した高校生向けワークショップを始めています。

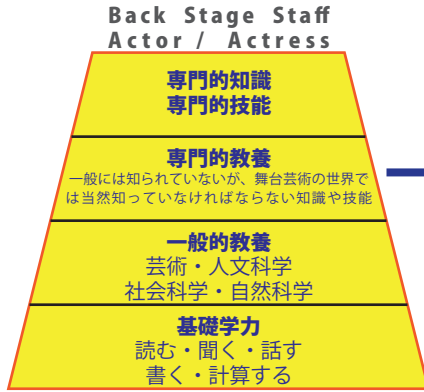
公演

お客を呼んでの演劇公演に関して、定期的に行っているものを四月から順に記しますと、四月下旬〜五月上旬「三年目公演」、「四年目公演」、五月中旬「二年目定期公演（春）」（二年生も参加）、八月「二年目試演会」、九月「二年目試演会」、十一月中旬「三年目公演」、「四年目公演」、一月「二年目定期公演（冬）」（一年生も参加）の八本となります。学生は在学中に最低でも短大生は六本、四大学生は十本の公演を体験します。この他に学生の希望（もしくは状況）によって「特別試演会」や「特別公演」、「卒

業公演」などが行われ、年間十本ぐらいの公演を行って
います。これらの公演機会は、実際にプロの仕事に触れ
る機会ともなります（学内インターンシップ的教育）。
その他にも、服飾を専攻する学生たちの学外発表会
（ファッションショー）やオープンキャンパス等でファッ
ションショーが行われた時のステージ設営や照明・音響
の担当、学会の照明・音響の手伝い、外部との連携イベ
ント時におけるステージ設営、照明・音響の手伝いなど
も積極的に行うように促し、舞台芸術研究グループで行
うワークショップや市民講座等でもできるだけ関わらせ
るようにしています（公演発表）。

総合的教育の実践

実践を行うこ
とによって、自
らの知識・技能
レベルの低さを
認識し、より高
い知識や技能獲
得への動機付け
になると考えて
います。
創刊号にも記
しましたが、大
学で舞台芸術を
学ぶ上で、知識・
技能を四段階に
分けて考えてい
ます。最初の二
年間で、「基礎



知識・技能

学力」と「一般的教養」、「専門的教養」を総合的な教育
の実践で培います。四年生大学の学生は最後の二年間で
「専門的知識・専門的技能」に踏み込んでいくという形
となります。

「専門的教養」を身につけるために「バックステージ
ナレッジ」というテキスト（出版はしていません）を作
成しています。第一章「舞台関係用語」、第二章「電気」、
第三章「照明」、第四章「音響」まで作っています。「舞
台美術・舞台装置」、「衣装・メイク」、「制作」などの作
成したいところですが、今のところまだ手をつけること
ができていません。

また、「北翔舞台芸術百選」と呼び、戯曲を一〇〇本
選び学生に二年間で読むように促しています。西洋五〇
選、日本五〇選（実際はもう少し多いですが…）。大学
図書館も協力してくれていて特別のコーナーを置いてく
れています。

いづれにせよ、実践を通して心（頭も含む）技体に向
上させていくという取り組みなのです（舞台芸術系教
育の位置づけ）。

研修旅行も行っています。富良野演劇工場研修と土別
市あさひサンライズホール研修はそれぞれ隔年で行われ
る「自主研修」旅行です。これと二年目に行われる「東
京研修」は重要な行事として位置づけています。特に「東
京研修」では国立能楽堂や国立劇場、新国立劇場のよう
な施設のバックステージツアーを行い、札幌ではなかなか
見ることのできない「歌舞伎」などを観るようにして
います（体験）。

往々にして学生たちは環境に不満を持ったり、○○だ

からできないようなネガティブな発想になったりすることがあります。そのような精神状態になると実践型の教育では効果が薄まってしまいます。そこで、インプロヴィゼーションを取り入れ、「ポジティブ」に思考することや「相手のアイディアを受け入れ、それにアイディアを付加する（相手のアイディアを否定しない）」ようなことを身につけるトレーニングを通して、どのような環境でも積極的に関わる習慣をつけてもらおうとしています。

近年、ブタゲに声優希望者が多く入ってくるようになりまし。三年ほど前からラジオドラマ制作を行っています（希望者）。脚本は学生が書き、音楽も学生のオリジナルです。非常勤講師の方が経営している会社の本格的なスタジオで、プロの編集者についてもらうという（ディレクターは一応学生）非常に贅沢な環境で制作しています。今年度からはカリキュラムに取り入れ、授業を通して制作で



総合的な授業の一つ。照明によって、メイク・衣装の見え方がどう変わるかを実際に見る授業。



前学期「ダンス」の授業。後学期の「ミュージカル研究」では5分程度のミュージカルをポルト研究授業時間に発表。



「声優トレーニング」。2年目の「ラジオドラマ製作」では、本格的なスタジオでラジオドラマを収録する予定。

きるようにしました（一年目前期には従来からあった「朗読・ナレーション」、一年目後期と二年目前期に新科目として「声優トレーニング」と「ラジオドラマ製作」）。また、今までポルト研究授業の中で、半期で二コマから二コマのダンスを行う時間を設けていましたが、声優・俳優をめざす学生のために強化し、一年前期に「ダンス」、一年目後期に「ミュージカル研究」を置きました。「ミュージカル研究」では、十分程度の短いミュージカルを創り（今回、曲は既成のものを使いましたが、将来的には学生にオリジナル曲を作って欲しいと考えています）、ポルト研究授業としてポルトホールで照明を入れて発表しました。

ブタゲは、開設当時の教育の特色を守りつつ、新たな取り組みを取り入れて、今後も進んでいきたいと思っています。